

長州の役（芸州口の戦い） 古戦場跡

幕府軍使 竹原七郎平の戦死

慶応二年（一八六六）六月十四日未明、開戦直前の緊迫状態の中、幕府軍使 竹原七郎平もりかず盛員（彦根井伊藩先鋒隊木俣土佐守第一軍使番百二十石武士三十九歳）は、従者二人（うち一人は曾根佐十郎正儀五十三歳）を従え、川霧の立ちこめる小瀬川に馬を進めた。その時の出で立ちは、赤い陣羽織に身をかため、軍扇を開き、封書を高く掲げて軍使であることを表示していたという。

一行が川の半ばに達したとき、対岸の竹藪に身を潜めていた岩国藩民兵諸団の一つ、戢翼団しゅう（百七名）の小銃隊が一斉に発砲し、竹原七郎平と曾根佐十郎は、ともに壮烈な戦死を遂げた。七郎平が携えていたのは、征討の勅允文ちよくいん（朝廷が認め許可した文書）と幕府の降伏勧告文だったといわれ、和戦両様の重要な使命を帯びての渡河であったと思われる。

七郎平の一行が川に乗り入れた場所は、大龍寺の南側に当たる川岸（大竹市元町二丁目）で、当時の絵図を見るとこの辺りは船着場であつたらしく、かなり広くなだらかな石畳が川の中へと続いていた。この斜面を下りた一行は、対岸（和木小学校裏）の竹藪の中にあつた願掛地蔵の東側小道を目指していた。和木町の安禅寺境内には、今なお彦根藩士の墓として七郎平ら三人が祀られている。